

いつも一緒に 富山のペットたち

肥満の危険性がより詳細に解明されメタボリックシンドロームの診断基準が策定されて10年、健康志向の高まりと相まって「メタボ」は誰もが耳にする言葉となりました。ペットの肥満も増加し、犬や猫にもメタボリックシンドロームの診断基準が設けられ、今年中には東京を皮切りに診療現場で利用されていく予定です。



今回は肥満によって起こる体の変化の一部を解説し、それを踏まえた減量についてもお話ししたいと思います。

脂肪過剰で代謝異常

脂肪細胞にはアディポカインと呼ばれるさまざまなホルモンを作る機能が備わっています。脂肪細胞に脂肪が過剰に蓄積すると、体に良いアディポカインが減り悪いアディポカインが増えてしまいます。このアディポカイン分泌の変化がさまざまな代謝の異常を起し、病気に進展するのです。

代謝異常の中でもインスリン抵抗性は重大な問題です。インスリンは糖質と脂質の代謝を調

エル動物病院院長
(舟橋村)

佐渡 啓樹

やせない・やせられない



整する重要な役割を担っており、作用する臓器によって違う効果を示します。インスリン抵抗性はこの作用が弱くなることです。抵抗性の強さは臓器によってバラバラです。そのため全身の代謝バランスは大きく崩れ、脂肪のさらなる蓄積と高脂血症、血流の悪化を引き起こします。

より脂肪や糖分を求めようにもなりません。脂肪の蓄積が進むと悪いアディポカインが炎症を誘発するほか、細胞やDNAを傷つける酸化ストレスを増やします。老化を早め、全身の臓器や皮膚、骨関節の病気を、時には癌の要因にまでなります。ペットの肥満も食べ過ぎと運動不足が主な原因です。避妊去

肥満体質の改善を

レプチン抵抗性というのもあります。レプチンは脂肪燃焼を促し食欲を抑える効果がありますが、肥満によってレプチンの効き目が非常に弱くなります。

勢でもレプチン抵抗性が起こる可能性があります。

根気強く続ける

このような代謝の異常により、痩せにくく太りやすい体質つまり肥満体質に変化してしまいます。脳にも変化が現れ、食事の満足感を感じにくくなり、

食事制限と運動が減量の基本ですが、注意が必要です。必要な栄養素はバランスよく取らないと体を壊すことにもなります。減量のため糖質制限や高タンパク食を利用した人は死亡リ



韋帯(じんたい)が断裂し手術した犬。体脂肪率は45%ほどあったが、写真を撮るまでの1カ月で35%まで減った

与えられず。不安やストレスも肥満の原因になります。適度に運動することでストレスを発散させてください。体質改善は長い期間を要しますが、体重が思うように減少してもしなくても、根気強く続けることが重要です。体質改善の研究も進んでいますし、どれだけ危険な状態になっているかという肥満の検査も近い将来にできるようになる見込みですが、健康で病院にかからずに済むのが何より一番です。

スクが高くなるという研究報告もあるのです。ペットも体重を減らすだけでなく、体質を改善するということも念頭に入れましょう。肥満体質では減量は思うように進みませんし、減量してもすぐにリバウンドしてしまいます。

運動嫌いな猫だと一苦労です。家猫が一番カロリーを消費するのは食事をおねだりしている時です。餌をうまく使って運動を促し、狩り遊びのようにできると食事に達成感や満足感も

「いつも一緒に 富山のペットたちは」は、毎月第一木曜日に掲載します。

適切なバランスの食事を適量でゆっくりと時間をかけて食べることが大事です。早食いはよくありません。餌を入れる玩具を使ったりあちこちに食事を分散させたりして、時間と頭を使わせましょう。運動も急に行うと関節や心臓、呼吸器官にも大きな負荷をかけてしまいます。体質改善には激しい運動よりもゆっくりと

通常の減量の方法では体重が落ちない猫。体脂肪率は約40%。投薬治療で体質改善を図っている